

公民最後の授業で平和を考えよう

静岡県 公立中学校教諭

1. はじめに

平和学習の単元は、国政や経済の学習を終え、扱いが軽くなってしまふことが多い。扱っている学習内容も、国際平和や国際協力など、生徒にとっても身近に感じる事が難しいのも、理由の一つだろう。しかし、これから社会に出ていく生徒にとって、公民的に国際平和を考える最後のチャンスとなるかもしれないのだ。

そこで、本授業案では、教科書第4部1章の「世界平和の実現をめざして」の単元では、教科書の構成の通り、実際にカンボジアの事例を追いながら平和問題について考えていくことに加え、生徒の身近に感じられるような工夫を試みた。

2. カンボジアとは？

「いろいろな国では、民族問題として、政治や宗教など様々な理由で対立がおこっている」といっても、生徒の共感を得ることはできないだろう。そこで、教科書p.154のカンボジアの和平までの道のりの資料が役に立つ。

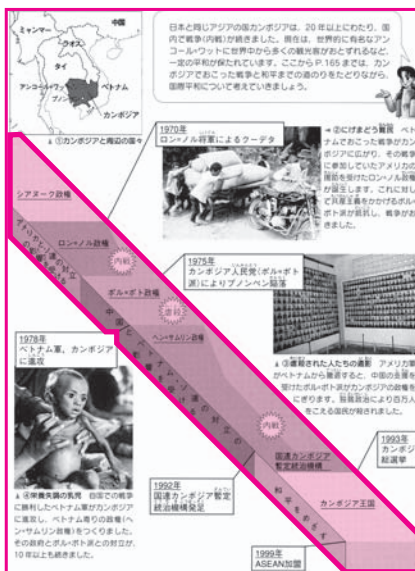
このページの中央の年表資料では、カンボジアが米ソ冷戦の国際体制の狭間で、ベトナム戦争の影響を受け内戦となり、1970年以降、20年以上にわたって混乱の期間となっていたことが読みとれる。とくに、ポル=ポト政権時の大虐殺は、国民の約1/3が虐殺されたという説もあり、3人に1人という具体的な数値を実感させるとよい。

その後、1992年の国連カンボジア暫定統治機構発足以降、復興と平和への道のりを歩み始めたわけである。

民族問題や内戦を知らない生徒に、ただ単にカンボジアの歴史を振り返るだけでは、インパクトが薄く、課題を与えても一般的な返答しかこないものである。

なぜ、カンボジアは戦乱に巻き込まれたのか、その背景を補うのも教師の役目である。

米ソ冷戦の対立では、資本主義と社会主義の国際体制の狭間で、ポル=ポト政権時には中国の影響を受けた共産政権とベトナムの侵攻の国家の狭間におかれた。教科書p.160①



「中学生の公民 初訂版」 p.154

の写真のように、戦う意味や主義も理解できぬまま戦う子どもたちの写真を参考にすれば、カンボジアのほとんどの人々は、望みもないまま、混乱に巻き込まれたと読みとらせることができる。

また、おなじp.160の図を使い、いまだに埋められている地雷の数に注目させてみよう。地図帳の統計を使い、日本や生徒の生活に当てはめてみるとよい。現在も敷設されている地雷が600万個だとすると、カンボジア国内には1km²につきおよそ33個埋まっている計算になる。東京ドームの広さに、約1.5個の計算になる。危なくて、とても野球をしようとは思えない。このように、生徒の身近な数値に置き換えて、その悲惨さを理解させるのも重要である。



「中学生の公民 初訂版」p.160

3. 平和学習での課題の設定

カンボジアの事例をもとに、授業を深める他に、次のような例をもって、生徒に平和への課題意識を持たせることができる。

<導入>

授業の導入として、生徒に二つのアンケートをとる。下の質問のように、日本と世界で生徒が平和でないと考える理由を挙げさせる。

下記のような解答が予測される。この集計結果を資料として、生徒に示すことで、日本における平和と世界における平和で、観点が違うことに気づかせたい。とくに、戦争や紛争という言葉に注目させる。

質問①

「日本が平和ではない理由」

予想される解答

- ・いじめが多いから
- ・犯罪や事件が多いから
- ・環境破壊が起きているから
- ・事故が多いから など

質問②

「世界が平和でない理由」

予想される解答

- ・貧しい人たちが多くから
- ・戦争や紛争が起きているから
- ・事件や犯罪が多いから など

<展開>

導入で、世界の平和のためには、戦争や紛争の解決が必要だと共通理解をはかることができた。次は、世界に様々な戦争や紛争・対立があり、民族や宗教・政治的など様々な背景があることを理解させたい。ここではKJ法的なアプローチを行っている。

まず、教科書p.155⑤の資料図にあるような、世界各地で起きている戦争や紛争について、新聞や資料を活用して次のようなカードを作成させる。これは、教師が用意してもよいが、時間があれば生徒にそれぞれ割り当てて調べさせたい。

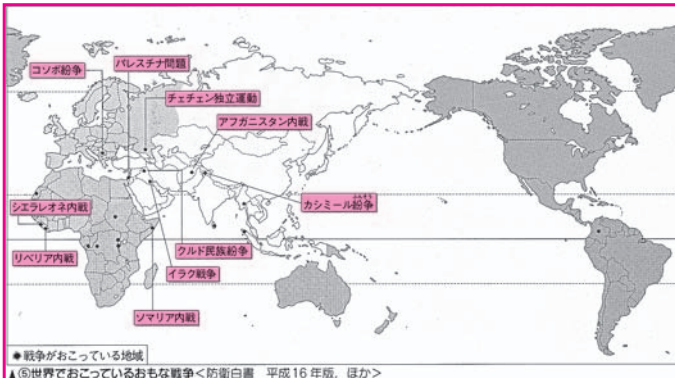
また、具体例が少ないため、防衛白書の資料や様々な市販地図帳・資料集を使い、過去の戦争や紛争についても挙げるができるようにするとよい。たくさんある方が、次の

展開に繋げやすい。カードは班ごとに使うため、複製しておくことが望ましい。

たり、様々なまとめ方が出てくるので、創意工夫についてコメントさせるとよい。

<まとめ>

授業の後には、戦争や紛争の原因が様々なであることを共通理解させる。そして、世界の各地で起こっている戦争や紛争に対して、中学生である自分に何ができるのか、また大人になったら何ができるのかをまとめさせる。日本政府の立場や内戦の国の政府・国民など、それぞれの立場でのロールプレイをしてもよいだろう。



「中学生の公民 初訂版」p.155

次に、集まったカードをそれぞれの班に配布し、それぞれの戦争や紛争の理由ごとに、カードを分類させる。生徒たちは、宗教や民族、政治など様々な視点から分類を始める。ここで、机間巡視をしながら、分類する際のキーワードなどを適宜助言すると作業が進みやすい。

最後に、分類したカードを模造紙などに貼りつけ、発表させる。このときに、現在進行中の紛争と過去のものを分けたり、深刻度別にグラフ的な表現をしたり、地域ごとにわけ



4. さらに踏みこむには

さらにカードで挙げた事例を深めていくことで、国際平和のために国連や日本、さらに自分たちができることを、調べて考えていくこともできる。

公民の教科書では、カンボジアの事例を、「戦争の現状→国連の働き→地域機構の働き→国際平和（核兵器）→日本の役割→ODAなど国際協力」という流れで考えている。この流れに沿って、他の事例でも「PKOは行われたのか？」や「核兵器はあるのか？」・「日本のODAはどのくらいか？」など、同様の観点で調べていくことで、さらに日本の果たす国際協力への課題などにもふれることができるようになる。生徒の課題としても、調べ学習として行ってもよいだろう。



5. おわりに

高等学校で現代社会を選択しない限り、生徒にとって最後の平和教育の機会となるわけである。様々な工夫をこらして、生徒にとって身近で真剣な問題として認識されるようにしたいと願うばかりである。

<p>国・地域：</p> <p style="text-align: center; font-size: 1.2em;">ソマリア</p>
<p>概要：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1980年代はじめから、反政府勢力が連合して、大統領を追放し、暫定大統領を選定した。 ・暫定政府の発足後、各部族勢力の内部抗争が表面化し南北が分裂した。 ・国連のPKO部隊が派遣されるが失敗し、撤退した。 ・何度かの和平交渉が行われたが、なかなか調印できず、2000年に和平が成立した。 ・その後も国内に独立を主張する「国家」や軍閥が多数あり、不安要素を多数抱えている。